

明代江南における伽藍神

その他のタイトル	Temple Guardian Gods of Jiangnan in the Ming Dynasty
著者	二階堂 善弘
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	48
ページ	59-68
発行年	2015-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/9284

明代江南における伽藍神

二階堂 善 弘

Temple Guardian Gods of Jiangnan in the Ming Dynasty

NIKAIDO Yoshihiro

Previous studies of the guardian gods of Chinese Zen Buddhist temples have concentrated on such deities as Qilang Daquan and Cishan Zhangdadi. But from examination of temple records and other historical sources, we discover that other guardian deities such as Zhouxuan Lingwang and Huode Zhenjun were also venerated. Moreover, Huaguang Dadi was also sometimes worshipped along with the previously mentioned deities. It is probable that all of these deities were also brought to Japan as temple guardian gods.

前 言

南宋時代に日本に渡来した招宝七郎大権・祠山張大帝、また江戸時代初期に渡来した華光大帝などの伽藍神については、すでに筆者の幾つかの論考で論じた¹⁾。ただその時、寺廟志などに残されている伽藍神の記載については、少数の例しか指摘できなかった。

その後、関西大学東西学術研究所アジア文化研究センター（CSAC）に所蔵される『方志庫』などの幾つかのデータベースを利用したところ、招宝七郎大権・華光大帝などの伽藍神祭祀の記録が確認できた²⁾。しかしそこには、さらに別の伽藍神が大権・華光と共に祀られている状況も見られた。また曹剛華氏などの幾つかの論文には、様々な伽藍神に関する詳細な分析がなされている。こういった資料をもとに、明代の寺院に見られる伽藍神の祭祀について再検討を加えてみたい。

1. 明代の伽藍神に関する記載

曹剛華氏は論文「心霊的転換」において、次のように伽藍神について論じている³⁾。

仏教と中国の伝統文化が融合していくなか、伽藍神の範囲は絶えず拡大してきた。多くの民間信仰の神々が仏教信仰と融合し、伽藍神の隊列の中に入っていった。その例としては関羽や蘇東坡などが挙げられる。一定の範囲において、これらの仏教と融合した民間の神々は、仏教の僧侶や信徒から礼拝を受け、像や廟が祀られることとなった。仏教の僧侶や信徒からすれば、これらの神々はすでに仏教神と目され、民間の神としては扱われにくいものとなった。一方で民間の庶民階層からすれば、これらの神々ははまだ民間信仰の痕跡を留めるものであり、一種の仏教と民間信仰との混合体とも言うべきものであった。

曹氏はこの文に続けて、仏寺で祀られた神と伽藍神の例を幾つも挙げる。すなわち関帝・蘇東坡に続き、華光大帝・王子喬・文昌帝君・玄天上帝・祠山張王・白鶴大帝・葛龍君・昭応龍王・

1) 筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』（関西大学出版部 2012年）。

2) なお、ここで使用したデータベースは、関西大学アジア文化研究センター所蔵の愛如生『中国基本古籍庫』『方志庫』が主であるが、その他にも凱希メディアサービス『雕龍：中国古典検索庫』などを用いる。さらに利用したネット上の情報としては、台湾中央研究院「漢籍電子文獻資料庫」(<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>) 及び CBETA 中華電子仏典協会「電子仏典」(<http://www.cbeta.org/>) などがある。

3) 曹剛華「心霊的転換：明代佛教寺院僧衆心中的民間信仰—以明代佛教方志為中心」（『世界宗教研究』2011年第4期）56頁。

周宣靈王・鄧將軍・三潭護境神・藍大王・陳將軍・吳文定公・米芾・陸秀夫などが祀られていたと指摘する。これらの神々については、寺院に併祀されていただけなのか、或いは伽藍神として祀られていたのかの区別が判然としないが、そのほとんどが伽藍守護神的な性格は持っていたのではないかと推察される。

曹氏が指摘する例のうち、幾つかの神は江南各地の寺院において明らかに伽藍神として祀られていたと考えられる。まず『聖水寺志』には次のようにある⁴⁾。

当山土地、護教聖徳明王広平侯・周宣靈王・招宝大権修喇菩薩、護伽藍神、合堂真宰、所祈山門、鎮静内外、咸安火盜、公私諸縁、吉慶十方、三世一切仏一切菩薩、摩訶薩摩訶般若波羅密。

広平侯・大権修利、それに周宣靈王が伽藍神とされている。周宣靈王は「周將軍」「周孝子」として知られる神であり、江南で盛んに信仰される神である。『上天竺寺誌』においては、次のような記載がある⁵⁾。

伽藍殿中、奉敕封福祐靈濟公像。左奉大権修利・華光・周宣・関聖諸神。右奉五頭神等坐像。祖師殿奉菩提達摩・天台智者。

これによれば、上天竺寺では、大権修利・華光大帝・周宣靈王・関帝、それに五頭神が伽藍神として祀られていることが判明する。ここでも、大権修利や関帝と並んで周宣靈王が祀られている。また中峰明本『幻住庵清規』には次のような記載がある⁶⁾。

光明会上護法列席諸天、三界万靈十方真宰。今年歳分主執陰陽權衡造化、賞善罰惡幽顯靈聰、五嶽四瀆名山大川、聖帝名王忠臣烈士。五方行雨龍王、六合雷公電炷、主風主雨主百穀苗稼、發生万物、無量聖賢、府县城隍大王、当境土地某神、近遠廟貌遐邇靈祇、本菴立地翊庇。俟周宣靈主護伽藍神、合堂真宰。廚司監齋使者、主湯火井灶神祇。

ここで挙げられている神々は多数にのぼる。ただその中でも伽藍神として登場するのは周宣靈

4) 『雲居聖水寺志』(清) 卷六「清規」本寺朔望祝延。

5) 積広賓『杭州上天竺講寺誌』清光緒錢塘嘉惠堂丁氏重刊本。

6) 中峰明本撰『幻住庵清規』(『卍新纂続藏經』第六十三冊)。

王のみである。また監齋使者・灶神の名も見える。さらに『雪嶠禪師語録』には次のように見える⁷⁾。

本山護法伽藍広沢龍王、双髻周宣靈王、靈山授記十八位伽藍。

ここでは広沢龍王と周宣靈王が伽藍神として挙げられている。広沢龍王も径山寺などで祀られていた龍神である。『金陵鎖事』には次のような記載がある⁸⁾。

歴歳年久而廢弛、沙門宗広於建文二年正月初四日、於奉天門午朝奏奉聖旨欽依重新修造鉄塔。結房塔頂黃緑瑠璃宝珠、覆盆仰盆、生熟銅鉄、顔料油漆、磚瓦木植、塔灯、四門仏像、諸天聖像。韋馱尊天、大権修利、齋糧、人功匠錢、周圍塔殿大仏宝殿、千仏閣、蔵殿、大悲殿天王殿、大山門、土地堂、祖師堂僧堂、法堂施檀林。

これらの記載から、明代において江南では華光大帝・大権修利・周宣靈王・関帝などの神々が有力な伽藍神であったことが推察される。ただ祠山張王については、ここで見たいずれの資料にも名が無い。

これらの伽藍神のうち、華光・周宣靈王・関帝は、『法界聖凡水陸勝会修齋儀軌』に記載されることで、ある種の固定化が行われた可能性がある。すなわち、志磐撰、雲棲株宏訂とされる『法界聖凡水陸勝会修齋儀軌』には以下のような記載がある⁹⁾。

本寺所属当境神祠、伽藍住居六神、山門奉事香火諸神、并諸眷属。本境梵村土地三夫人合廟神衆、近境清芳亭廟、朱橋廟、陳百二十五相公廟一切神衆。当境五道大神、半天牧野神官、諸部五通神衆。一十八位護教伽藍、本寺華光之神、周宣靈王之神、関王之神。本寺主山神。住居中霽土地明王、門丞戸尉、東厨司命、監齋使者神衆。住居方隅太歳、二十四道諸土神衆。中庭力士、屋上広漢、主泉神、主単神、主園林神、主後廟神、一切神衆。

ここでは華光大帝・周宣靈王・関帝の三つの神が挙げられている。この部分は水陸会の行われる実際の状況にあわせて書き換えられたものと考えられる。ただこの例自体は、志磐、或いは

7) 円信説、弘歇等編『雪嶠禪師語録』（『乾隆大蔵経』）卷一。

8) 周暉撰『万曆金陵鎖事』明万曆三十八年刊本。

9) 志磐撰、雲棲株宏訂『法界聖凡水陸勝会修齋儀軌』（『卍新纂統蔵経』第七十四冊）

雲棲株宏が見た実際の寺院の状況が反映されているのであろう。

なお大権修利については、阿育王寺において靈鰻が化身したものであるという記載が見える¹⁰⁾。

神明效靈、人貴於物、物靈於人、非謂倒置、一念之真、矧彼修利、自称大権、亦有羅漢役鬼因縁、金沙之井、靈鰻天嬌、魚中有龍、效靈非小、人亦有龍、自不知聖、辜負已靈、埋没佞性。

大権修利が神として扱われるには、阿育王寺における祭祀がその起点になっていると考えられる。ただ、寺院側の資料において大権修利は「大権修利」とのみ記され、「招宝七郎」と称することは少ない。もっとも、これはたとえば華光大帝が、道教側の資料では「馬靈官」と称され、仏教側の資料では「華光菩薩」と称されることが多いのと似たような現象であるかもしれない。

2. 周宣靈王について

江南の寺院において、大権・関帝・華光と共に祭祀されることが多いのが周宣靈王である。ここで簡単にその性格について見てみたい。

周宣靈王については、濱島敦俊氏・朱海濱氏による詳しい研究がある¹¹⁾。それによれば、周宣靈王は、周孝子とも称され、江南地域で盛んに信仰された神である¹²⁾。

周宣靈王の信仰は南宋中期に起こり、その元となったのは、南宋杭州新城の人である周雄である。周雄は淳熙十五年（1188）に生まれ、二十四歳で亡くなった。周雄の没後、彼は五通神の従神に位置づけられた。その後、周雄の信仰は拡がっていき、中央政府も絶えず各種の封号を与えていった。その靈異の機能は、旱の害を防ぐということと、疫病の予防であった。これは典型的な地方の守護神の役目に当たる。明代中期以降には、蘇州の孝子である周容の信仰の影響を受け、またさらに浙江の民間社会においては、元代の新城の孝子であった周徳驥の事績を利用し、周雄の生前の孝子としての物語を作為していったのである。

10) 『明州阿育王山志』巻五。

11) 濱島敦俊『総管信仰』（研文出版 2001年）、朱海濱『祭祀政策与民間信仰変遷—近世浙江民間信仰研究』（復旦大学出版社 2008年）。

12) 前掲朱海濱『祭祀政策与民間信仰変遷—近世浙江民間信仰研究』159～160頁。

朱氏によれば、周宣靈王はその後水運の神としての性格も併せ持ち、交易を行う商人たちから崇拝されたということである。明代には浙江の嚴州府に宣靈廟・靈順廟という大きな廟があったとされる。その廟会の日は三月四日・四月八日であったとされる。四月八日であれば、釈迦牟尼仏の生誕と廟会が重なったかもしれない。

この水運業に関連が深い神といえ、やはり伽藍神である招宝七郎・祠山張王の二神が想起される。以前、筆者は招宝七郎と平水大王は別の神ではないかと指摘する文章を書いた¹³⁾。平水大王も、その名は周凱であり、江南一帯に流行した「周某」神の一類であるかとも考えられる。

ただ、大権修利と周宣靈王を組み合わせて祀る例は、先に指摘したように、幾つかの例が見られるのに対し、祠山張王と周宣靈王を組み合わせたパターンはほとんど見ない。或いは、明代においては祠山張王の水運の神としての信仰が衰え、それに代わって周宣靈王がその地位を占めた可能性もある。

伽藍神としての周宣靈王が日本の寺院に来ていた可能性はあるが、南宋中期からその信仰が発展したということもあり、これは何とも言えない。伽藍神像のうち、幾つか来歴不明のものは、この周宣靈王であるかもしれない。

なお、関帝と華光、それにもうひとつの伽藍神という組み合わせは、福建福清の「古黄檗」萬福寺の伽藍殿にて見ることができる。



福建福清黄檗山萬福寺の伽藍殿

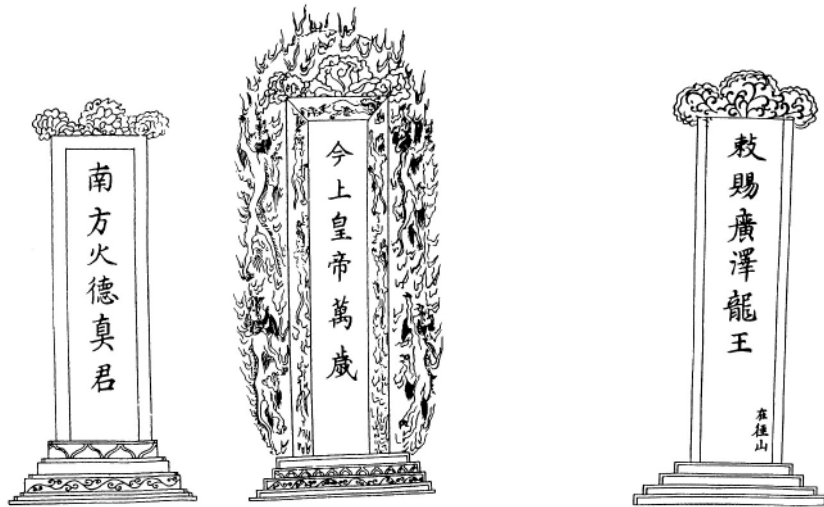
13) 筆者「平水大王と招宝七郎」氷上正他著『近現代中国の芸能と社会—皮影戲・京劇・説唱—』（好文出版2013年）113～123頁。

左にあるのは明らかに関帝で、右には金磚を持った華光大帝が配される。中心に位置するのは、一見すると文昌帝君、または文財神比干にも見えるが、或いはこれは『法界聖凡水陸勝会修斎儀軌』に則ったものかもしれず、その場合は周宣靈王であると考えられる。ただ、この像は比較的新しいものであり、本来は周宣靈王であったものが、他の神に変わった可能性も否定できない。

3. 火徳星君の祭祀

伽藍神に関連する神として、よくその名が見えるのが火徳星君である。無著道忠は、火徳星君について、「禅林仏殿安南方火徳星君牌、毎月四日・十八日諷経」とする¹⁴⁾。

『五山十刹図』の中には、火徳星君・広沢龍王の位牌の図が見られる¹⁵⁾。



火徳星君・今上皇帝の位牌

広沢龍王の位牌

広沢龍王については、以前に少し論じたことがある¹⁶⁾。広沢龍王は五山の径山寺において伽藍神として扱われた龍王である。先に見た『雪嶠禅師語録』にも、この龍王が周宣靈王と共に伽藍神となっていた記載があった。この龍王が南宋期に日本にも来ている可能性は高い。もっとも、それと比定できる像はまだ発見できていない。

火徳星君は道教では著名な神で、また「火徳真君」、或いは単に「火神」と称することもあ

14) 無著道忠『禅林象器箋』霊像類下。

15) 張十慶『五山十刹図与南宋江南禅寺』（東南大学出版社 2000年）144～149頁。

16) 筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』（関西大学出版部 2012年）53～54頁。

る。五行では南方を司るため、位牌のごとく「南方火徳真君」とも呼ばれる。火の神であり、火災の予防のために祀られることが多い。大陸には火徳星君を祀る火神廟は数多く存在する。火の神であり、その性格は華光大帝と類似するものがある。

『宋史』には次のような記載があり、宋代に火徳真君の祭祀が官方によって行われていたことがわかる¹⁷⁾。

建中靖国元年又建陽徳観以祀熒惑。因翰林学士張康国言、天下崇寧観並建火徳真君殿、仍詔正殿以離明為名。太常博士羅崎請宜倣太一宮、遣官薦獻、或立壇於南郊、如祀靈星・寿星之儀。有司請以闕伯從祀離明殿、又請増闕伯位。按春秋伝曰、五行之官封為上公、祀為貴神。祝融、高辛氏之火正也。闕伯、陶唐氏之火正也。祝融既為上公、則闕伯亦當服上公袞冕九章之服。

この文章や『禪林象器箋』などでは、いにしへの火神である祝融と火徳真君との関連を指摘するが、祝融神が火徳真君に発展したというより、火神という性格から単純に結び付けられた可能性が高い。また民間における火徳真君の知名度はそれほど高いわけでもない。

尾崎正善氏の指摘によれば、初期の回向文である禪林寺本『瑩山清規』に次のような記載が見えるとのことである¹⁸⁾。

上来諷誦、大悲円満無碍神呪、消災妙吉祥神呪、所集功德、回向真如實際無上仏果菩提。祝献、護法龍天、護法聖者、三界万霊、十方真宰、日本国内大小神祇、当山土地、当山龍王、護伽藍神、十八善神、招宝七郎大権修利菩薩、白山、八幡、監齋使者、多聞、迦羅、稻荷神等、合堂真宰、今年歳分、主執陰陽、権衡造化、南方火徳星君、火部聖衆。殊勲、祝献、本寺檀那・十方施主・合山清衆本命元辰、当年属星、守道守宮、一切聖造。所冀、山門鎮静、修造無難、十方施主、福寿莊嚴、法界衆生、同円種智者。

ここでは、大権修利・龍王・監齋使者などの伽藍神に加え、白山神・八幡神・稻荷神などの日本の神々の名も見えている。後の部分に「火徳星君」「火部聖衆」の名が見える。こういった回向文に多くのバリエーションが存在し、含まれる神々に変化があることは、尾崎氏が詳細に指

17) 『宋史』 卷一〇三、志第五十六「吉礼六」。

18) 尾崎正善「禪宗儀礼の研究—儀礼の変遷過程とその背景—」(『禪研究所紀要』42号愛知学院大学禅研究所) 6頁。

摘している。『瑩山清規』でも、他本では以下のように記される¹⁹⁾。

上来諷誦、大仏頂万行首楞嚴神呪、所集鴻因殊勲、回向真如實際無上仏果菩提。祝献、護法龍天、一切聖造、三界万靈、十方至聖、日本国内大小神祇、当山土地、龍天善神、合堂真宰、主執陰陽、權衡造化、善惡聰明、南方火德星君、火部星衆、修造方隅、禁忌神将、厨司監斎使者、稻荷、迦羅、多聞、陀天、普資聖徳。

また『諸回向清規』には以下のような記載がある²⁰⁾。

上来諷誦経呪所集殊勲回向、真如實際莊嚴無上仏果菩提。祝献、護法諸天大権真宰三界万靈十方至聖、今年歳分主執陰陽權衡造化善惡聰明、南方火德星君火部聖衆、十方檀那本命元辰吉凶星斗、本寺護法祠山正順昭顕威徳聖列大帝、大権修理菩薩、土地護法冥王掌薄判官、感応使者、日本国伊勢太神宮、八幡大菩薩、賀茂下上大明神、松尾大明神、平野大明神、稻荷大明神、春日大明神、熊野三所大権現、白山妙理大権現、熱田大明神、日吉山王、祇園牛頭天王、北野天満大自在天神等。総日本国内大小福德一切聖賢厨司監斎使者、修造方隅禁忌神将次冀。

ここに現れる神々の名称が興味深い。伽藍神は、祠山張大帝・大権修利・掌薄判官・感応使者とあり、その後に日本の八幡菩薩・松尾明神・稻荷明神・春日明神・熊野権現・白山権現・日吉山王・牛頭天王・天神などが挙げられている。また『諸回向清規』には別に次のような記載も見える²¹⁾。

日本国・大明国差来使者正使比丘某等、船中今月洵取吉日良辰、拜請現前清衆看閱大般若波羅蜜多經観音普門品、般若心経消災妙吉祥神呪、則時満散諷誦、大仏頂満行首楞嚴神呪所鳩善利回向、真如實際莊嚴無上仏果菩提。十方常住三宝果海無量聖賢、現座道場大慈悲

19) 「SAT 大正新修大蔵経テキストデータベース」(<http://21dzk.lu-tokyo.ac.jp/SAT/>) 所収のデータに基づく。『大正大蔵経』No. 2589 『瑩山清規』。

20) 前掲「SAT 大正新修大蔵経テキストデータベース」より、『大正大蔵経』No. 2578天倫楓隠『諸回向清規』「諸回向清規式」巻第一。

21) 前掲「SAT 大正新修大蔵経テキストデータベース」より、『大正大蔵経』No. 2578天倫楓隠『諸回向清規』「諸回向清規式」巻第二。

父広大靈感觀世音菩薩、般若会上十六善神、梵天帝釈、四大天王、日月両宮天子、南方火徳星君火部聖衆、今年歳分主執陰陽権衡造化賞善罰悪一切聡明、天妃娘娘菩薩、五大力菩薩、招宝大権修理菩薩、四海八海諸大龍王馮夷、風伯大小靈神。今上皇帝建生所属吉凶昭臨乾象、大檀那本命元辰乗船各人本命元辰、日本顕化伊勢太神宮、八幡大菩薩、賀茂上下大明神、松尾大明神、平野大明神、稻荷大明神、春日大明神、聖母大菩薩、神功皇后宮、龜山大菩薩、集人大明神、若宮大明神、日吉山王、住吉大明神、三村大明神、祇園牛頭天王、標留大明神、志賀大明神、北野天満大自在天神、愛宕大権現、妙見大菩薩、熊野三所大明神、御霊八所大明神、巖嶋大明神、七郎大権修理菩薩、當境旺化諸大権現諸大明神。綵大明日本両国内大小福德一切神祇山林界相守護靈明。

これは「唐船守護」のための回向文なのであるが、そこでも火徳真君の名が見えるのが興味深い。また日・中・印の様々な神々が混淆しており、帝釈天や天妃媽祖や招宝七郎、住吉明神などの水神を中心に、さらに妙見菩薩や愛宕権現など、非常に多岐にわたっている。

結 語

これまで伽藍神については、筆者は祠山張大帝・七郎大権を中心に考察してきたが、さらに多くの神が明期に祭祀されていることが寺院資料などから判明した。中でも周宣靈王・華光大帝などの神は江南においても広く祀られ、また火徳真君などの神もあり、現在のような関帝一尊が強い状況とは異なることがわかった。さらに一部の寺院で『法界聖凡水陸勝会修斎儀軌』を根拠として、周宣靈王・華光大帝・関帝を伽藍神として祀ることが行われていたことが判明した。こういった神々も、伽藍神として日本に渡来してきている可能性は高いと考えられる。

周宣靈王については、現在でも江南に幾つかの廟が残されている。火徳真君については、廟は大陸の全体にわたって存在し、いまでも祭祀が続いている。台湾にも火神廟は幾つも存在する。ただ、現在の大陸の寺院においては、火徳真君の位牌や神像を見ることはほとんどなくなっている。今後はこういった周宣廟や火神廟の現地調査を行い、考察を深めたい。